

本誌 132 号ですすでに報告した第 1 回目の研究会では先行研究の吟味と「驚異」の定義が試みられ、研究の枠組みと方法が議論された。第 2 回目以降の研究会では、毎回驚異譚をめぐる共通の主題を設定し、研究発表と討論を行ってきた。2011 年 2 月 6 日（東京大学）に開催した会では「海の驚異譚」、同年 6 月 11 日（北海道大学）の会は「驚異としての古代」、同年 8 月 24 日（国立民族学博物館）は「奇跡・魔術と驚異」というテーマでまとめ、メンバーや特別講師が発表をした。

海の驚異譚

本研究会の第 2 回目の集まりでは、驚異譚の舞台としての海と島のトポグラフィについて議論がされた。

まずは特別講師の家島彦一（東京外国語大学名誉教授）が、「アラブ文献による驚異譚——とくに 10 世紀、ブズルク・ブン・シャフリール『インドの驚異譚』による——」と題した発表を行った。『インドの驚異譚』は、船乗りや商人たちが語る東方の奇譚を集めた、かなり早い時期の驚異譚集である。中東発の海洋交易の様相（航路、乗組員、船の種類や構造、交易品、海難事故、自然地理など）をうかがい知ることができる貴重な

歴史資料としての価値に家島は注目しているが、「海のシンドバード」とも共通する要素が多く、娯楽性も大いに含んでいる興味深いテキストである。

次に杉田英明（東京大学）が「巨魚島伝説の東西伝播」と題して、島と間違われた巨大な魚（または蟹、亀）の説話が中東、ヨーロッパ、そして東アジアにどのように伝わっているかを、具体的なテキストと挿絵をふんだんに使って検証した。「海のシンドバードの航海譚」にある、船乗りたちが島に上陸して火を焚いたら、実はそれは巨大な魚の背であり、命からがら逃げるといふ話と、中世ヨーロッパ各国語で伝わった『聖ブレンダヌス航海記』にある類似の話との関係は、これまでも指摘されてきた。杉田はこの他、ギリシア語の博物誌『フシオロゴス』（150-380 年ころ）、ユダヤの口伝律法『タルムード』に含まれる 3 世紀後半までさかのぼる伝承、そして仏典ジャータカの漢訳『生経』（285 年）に含まれる「仏説龍諭経」に、同類の逸話が存在することを示し、同一の物語の別言語版が東西に伝播した可能性を指摘した。

最後に山中が「アラブ・ペルシアの驚異譚における女人国伝説」について発表した。9 世紀から 14 世紀の間に書かれたアラビア語・ペルシア語の地理書、博物誌、叙事詩などには、女ばかりが住むという島や都の話が散在するが、それらは伝播経路によっていくつかの話型に分類することができる。ギリシアの地理書・医学書や「アレクサンドロス物語」の翻訳を通して伝わった、「アマゾン型」の伝承では、戦のために胸を除去するという勇猛な女戦士の集団が描かれている。一方、中国や日本に類話がある「女護島型」の伝承もあり、おそらく中東と東アジアの海上交易を通じて伝わってきたと考えられる。女ばかりの島に漂流した船乗りたちが女たちに襲われ、1 人を除いて全滅してしまうといった内容のもので、女たちが水（あるいは風）によって孕むという要素が加わることもある。さらに、両方の系統が混合したかたちの話もある。

海をめぐる驚異譚には、実際の海洋交易を通じた人の移動の歴史や、異なる文化圏の伝承が接触し、融合した形跡が垣間見られる。また、海での漂流を経て島＝異界へ至るプロセスを語るという叙述は、東西に共通して見られる驚異譚の 1 つの定型であるといえる。

驚異としての古代

「古代」をテーマとした第 3 回目の驚異譚研究会は、初夏の札幌で行われた。橋本隆夫（神戸大学名誉教授）がまず「ギリシアにおける驚異譚の伝承」を発表した。紀元前 5 世紀頃に「理性」（ロゴス）と「神話・空想」（ミュトス）が分化してゆくなかで、そのどちらからも漏れてしまったのが「驚異」（タウマタ）であったという指摘は非常に興味深かった。また、中世の中東とヨーロッパにおける辺境民族の表象の原型が、不思議な民族を表すギリシア語の造語——「犬頭族」、^{キヌノケパロイ}「足が日陰族」、^{スキアポデス}「胸に目族」^{ステルノプタルモイ} など——にあることがわかった。



島かと思ったら巨大魚・・・
マルドリユス訳『千夜一夜』へのレオン・カレ（1878-1942）の挿絵

次いで古代中国の遺跡に話は移り、武田雅哉（北海道大学）が特別講師として、「万里の長城は月から見えるの？」を発表した。武田によると、万里の長城が月から見えるという言説の起源は実はヨーロッパにあった。それを逆輸入した中国の人々は、比較的身近にある遺跡を世界随一の驚異たらしめるために、天空からの視点に（実際には見えないことが証明された後も）こだわり続けたという。

続いて守川知子（北海道大学）が、「『七不思議』を超えて一西アジアの古代遺跡とアジャーイブ」と題する発表で、アラビア語・ペルシア語の地理書や博物誌に含まれる古代遺跡にまつわる記述をとりあげた。一見に値する巨大建造物を「タウマタ」（驚異）として数えあげるといった伝統は古代ギリシアにその起源があるが、イスラーム以降の著述家たちにも引き継がれ、対象となる遺跡は地中海世界からイランへ、特にササン朝の遺構へと重心が移っていったという。実際に目で見て確認することのできた遺跡は、イスラーム時代以前と以後の「断絶」を超越した記憶・伝承を具現化する存在であったことが明らかにされた。

最後に、見市雅俊（中央大学）が「古事物学文献にみる驚異について」を発表した。「古事物学」とは *antiquarianism* の訳語で、化石・遺物・口頭伝承などを通して「故郷」や「国土」の古層を明らかにしようとする知的営為のことである。17世紀イギリスの古事物学者の作品を中心に、その論説が「国民」を包摂する「国土」の概念の形成にどのような役割を果たしたかを論じた。

海や島の驚異譚の場合は、到達が困難である空間的な遠さが、異境の不可思議な現象に対する好奇心をかきたてる。一方で、古代遺物や化石は、モノとしては比較的身近にあって実際に見ることができても、明確な来歴を不可知にしている時間的な「遠さ」が、それらを驚異的な存在としているのではないかということが、この2回の研究会を通してわかってきた。

奇跡・魔術と驚異

第4回目の研究会では、驚異と奇跡と魔術の相互関係を比較考察した。

まず菅瀬晶子（国立民族学博物館）の「東地中海アラブ地域におけるマール・ジュリエス（聖ゲオルギオス）崇敬の語りー奇跡譚を中心として」は、ムスリムとキリスト教徒双方の聖者として信仰されている聖ゲオルギオスをめぐる、崇敬の実践や奇跡譚の伝承をとりあげた。信仰のよすがとなる聖者が日常に溶け込んだ存在であり、その聖者が起こしたとされる奇跡に関する語りも身近な崇敬の場が舞台であることが強調された。



左上が「犬頭族」、左上から3番目が「胸に目族」、左下から2番目が「足が日陰族」
『ニュルンベルグ年代記』 *Liber chronicarum* 1493年より

次いで二宮文子（日本学術振興会）が「奇跡譚はいかに語られたかー13-14世紀インドのスーフィー聖者の語録から」を発表した。この世の一定の秩序という「慣習」を神が破棄することが「奇跡」（ムウジザ）であるという、アシュアリー派の原子論における奇跡の定義がまず紹介されたが、イスラームにおける「驚異」の位置づけについて考えるヒントとなった。また、スーフィー聖者の伝記や語録にある様々な奇跡の試分類が興味深かった。

辻明日香（東京大学）は、「コプト聖人伝にみられる〈驚異〉な奇跡譚」と題して、14世紀エジプトのアラビア語コプト聖人伝について発表した。その編纂意図と特徴について述べた上で、個々の奇跡譚を「現実ー超現実」という座標軸と「聖ー俗」という座標軸の上にマッピングしてゆくという類型化を試みた。

最後に黒川正剛（太成学院大学）が「西欧中世末・近世の魔女言説にみる奇跡・魔術・驚異」と題した報告を行った。中世末から近世（15世紀末～17世紀末）の魔女言説および悪魔学論文を素材とし、「自然」を議論の軸とした驚異・奇跡・魔術の概念の定義、および概念同士の相互関係の歴史の変遷についての考察を行った。

驚異譚との比較の対象として奇跡譚をとりあげてみて明らかになったことは、まず、奇跡譚には空中浮遊、水面歩行、病の治癒などといった一定の型があり、叙述の展開が予測可能であるという点において驚異譚とは異なるということである。さらに指摘できるのは、神を信じさえすれば、奇跡譚の真否は疑う余地がなくなるわけであるが、驚異譚の場合は、その信憑性を担保するため（あるいは情報の正当性を保証することから責任回避するため）の叙述の仕掛けが必要であるということである。この「仕掛け」については、今後も詳細に検討してゆく必要がある。

2年目にあたる今年度は、アラブ地理書を担当する家島彦一、聖者信仰との関連を担当する菅瀬晶子、インド洋交易がはぐくんだ驚異譚を担当する鈴木英明がメンバーに加わり、ますます活気づいてきた。しかし大変残念なことに、6月の会の後に病気が再発された橋本隆夫氏が去る10月31日に亡くなられた。謹んで哀悼の意を表する。

やまなか ゆりこ

民族文化研究部准教授。専門は比較文学比較文化。単著『アレクサンドロス変相：古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会 2009年）が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。